

# 平安京左京三条一坊四・五町 発掘調査

調査地	京都市中京区西ノ京勸学院町3、西ノ京南聖町2	
調査期間	平成30年8月3日～9月22日(予定)	
調査面積	約180㎡	
調査原因	宅地開発	
計画機関	GOLD FOREST 株式会社	
調査機関	有限会社 京都平安文化財	<a href="http://iseki-haktsu.com">http://iseki-haktsu.com</a>

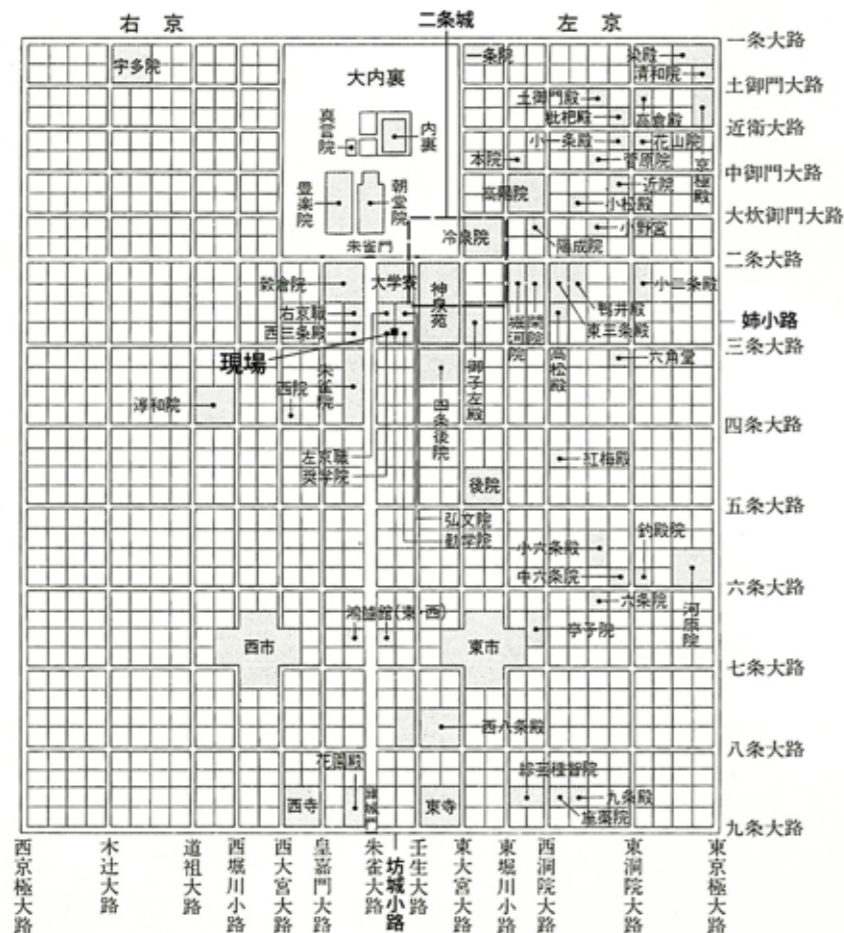
## 1. 歴史環境の一端

調査地は、平安京の左京三条一坊の四町東端から坊城小路をはさみ五町西端に及ぶ。朱雀大路（現千本通り付近）の1本東側に並ぶ坊城小路は、四町と五町の間を南北方向に走る。大内裏平安宮の南面の正門である朱雀門（現千本二条付近）にも近く、宮の東南フロント隣接地域という京域内の一等地に位置している。宮の正面となる当地が位置する南側や東側の宮の近接地域には、国の官庁やその関連施設、また天皇家や藤原家関係の宮殿が建ち並んでいました。

左京三条一坊内では、その西半の北半となる一・二・七・八町の計4町には、国の大学寮、四町には在原家系の奨学院、五町には藤原家系の勸学院、六町には和氣清麻呂の私宅を教育機関とした弘文院など、国立・私立の大学やその寮・宿舍が建ち並んでいました。三町には、左京職という主に左京を管理する役所が建っていました。一坊の東半となる九～十六町の計8町には、東西二町（約250m）×

南北四町（約500m）となる広大な苑池を伴った神泉苑が桓武天皇によって造られています。その神泉苑は、御池通りと二条城の間に現存していますが、平安時代に比べると規模は1/16以下と小さくなっています。しかし縮小されたとはいえ苑池も残っており、平安京の往事の姿を偲ばせる大遺跡であり、国の史跡に指定されています。このように左京三条一坊は、まさに平安時代の前期から教育・文化ゾーンであったようです。

しかし、三条一坊の神泉苑より西側は、右京や朱雀大路と同様に、平安時代の後半代に入る中期後半以降には急速に衰退が進み、同後期から中世頃には、芹田などを含む耕作地化するよう、再び宅地化するの、江戸時代後期以降のようです。



平安京における調査地の位置



遺構第1面(西から) 江戸時代以降



遺構第2面(西から) 平安時代

## 2. 調査成果

平安時代前半期に位置付けられる坊城小路の路面残存部、東側溝及び西側の湿地帯の東辺に、小堤と杭と横板で造り出された側溝の西肩部などを検出しました。同時期に西側溝以西は、まだ湿地状を呈しており、四町北東部は平安時代には宅地的土地利用は進まないままで中世へ至るようです。五町の西辺では、築地の雨落ち的な幅30cm深さ20cm程の溝状遺構を検出したにとどまる。

坊城小路関係の側溝ともみられる溝状遺構や自然的湿地帯的遺構内堆積土等からは多数の遺物が出土している。土師器、坏A皿A、高坏、甕・須恵器、坏A、同B、同蓋、壺、甕・緑釉陶器、碗皿・灰釉陶器、碗・軒丸瓦、丸瓦、平瓦など、9世紀に位置付けられるものが量的に主体をなす。湿地の中、上層堆積土から少量の10世紀代の土師器皿等が出土しており湿地の西方への縮小は、10世紀以降進むようだ。これらの他に、湿地内堆積土からは、板状等の木製品あるいは木片等がかなりの量出土している。

平安時代後半代以降近世後半頃までに位置付けられる遺物の出土は、少量にとどまる。江戸時代後期以降から近代には出土遺物が再び増加傾向を示す。江戸時代後期以降宅地的土地利用が大きく進み、現代へ至るようである。

しかし、江戸時代前期と見ている、東へ移動した石敷路面を調査区東辺沿いで検出している、平安時代以来の遺構面(2)に30cm程度の積土的整地がなされて石敷路面が形成されている。遺物等からは江戸前期の内でも寛永頃と推定される。時間的位置的には、家光の二条城の再構築に伴う、二条城周辺街区の整備に伴い築造された坊城通りであろう。現代のアスファルト敷の坊城通りは、江戸時代に再築された通りを踏襲しつつ東へと縮小して、現代に至ったものと推測している。

## 3. まとめ

平安時代以降の坊城小路や江戸時代に再築された坊城通りに関しては、その変遷を理解できる考古学的記録情報が得られた。しかし四・五町内に関しては今後の調査の増加をまって理解を進めたい。